元よろく風

自一号
至九号

慶応四年五月

特別
18
798

左傳

第壹

定價壹圓

貴
18
798

緒言

人の見聞を弘むるハ新聞ゟ過きゞ都下ゟ住ぬる者ハ日〻新聞を得て知識を博すべくも僻邑なてハ聞くるおそし故ゟ近頃新聞の盛なる所指ゟ暇なゝ吾社中も亦新聞を刺して以て都鄙ゟ弘めんとす故ゟ事の軽重と文綴の工拙ゟ関せゞ随て刺す見る人其鄙俚を尤むることなかれ

慶應四年壬申四月

詳知會社謹言

[illegible]

慶應四年五月一日

苟よ吹風第一號

○四月十日頃或藩三十五名北方へ脱走
を其隊中より十六才の少年養子よりて其
實又へ文通の写

一筆啓上仕り然る私儀此度君恩のさめ勉強忠
節変心より出坐り事何より江府より於ては赤心不
相立り故一同申合せ三十五名脱走いたし北方
へ来る心ゆえり事途中南方の兵諸藩より屯集居
る私共小山よりて一戦いたし雄よりて引き取り
申し誠に此戦ひハ味方勝利一同大悦のいたり

南兵の兵敗走いたし結城より一里程手前より南
兵の本陣有之右小山戦ひの後引揚き彼本陣へ
又く攻入りゆえ是れまで勝利私共兵隊より大
砲三門分捕り仕い實ゆ武門の名誉おれまをぎ
ずい猶今日大平山ゆ屯集居りい今ゆ徳川家の
磐ゆ鎮く振ひ中い間豆出法一聲奉帯い以上

四月十七日

父上様

但一三十人名の隊へ上只野勇ゆ情徒
四十人程味方仕いとて大平山へ来る

○壬四月廿三日八ッ半時頃より八丁堀亀
嶋橋ゆ吳服橋東湊町ゆ橋との間ゆ子
供の喧嘩有之一笑のため左ゆ記す

一八丁堀の子供ハ亀嶋橋ゆ陣取り吳服橋東湊町
の子供ハ高橋ゆ陣取り双方龍虎のあらそひの
如き勢ひよて七ッ半頃より橋ゆとの間ゆ双方の
子供操出たき合ひ始り益〻盛ゆ相成り容易
ならぬ喧嘩よて双方へ大人七八人位て取り
扱人として入込みゆ夕方よふやく引き分けゆ相
成り道路見物人山の如く如何よも近頃珍ゆ喧

花かり其外所くゝ多分有之よし

一先達中所くゝ戰爭ありけるバ薩人勝元師へ迫て責曰□□公卷須と称しおごり宦軍ゝ對して干戈を動そハ　天朝を欺ゝ非そや勝答曰去年中江戸ゝ於て薩藩強盜を働きたるハ修理亮殿の知る所ゝ非さる通り主人不知家来のかそ如何共そる克ゝ汝等我ゝ門人とかり通を學びけホを志ゝぞや薩人唯くゝとして去れ

○深川伊勢崎町より来りし者の咄ゝ

一久世様法中変へ壬四月廿三日朝五時頃不意ゝ兵隊三十人程其内ゝ隊長と覚しきその二人騎馬ゝて押入り四ツ時頃迄切り合有之尤も小銃の聲音五六發相聞へ間もなく右隊長と見受たる者駕籠ゝて引取りそも怪我人ハ三四人の様子ゝり何れの浪士かゝるや不相分此近隣大騒動の由又く確實ゝハ不二号ゝ紀すへし

○下總より来状の写

一四月三日曉七ツ時頃より八幡鎌谷ゝて戰爭有之

八幡宿ゟ陣取引上方勢余程敗走市川へ引取
り脱走方追討い多〳〵朝五半時頃より戦争
さうんゟ相成り鎌ヶ谷宿の上方勢八幡へ揉出〳〵
い途中ゟて脱走方ゟ戦ひ上方勢敗走のよ〳〵

○野及白澤宿ゟ宮宿より来状の写

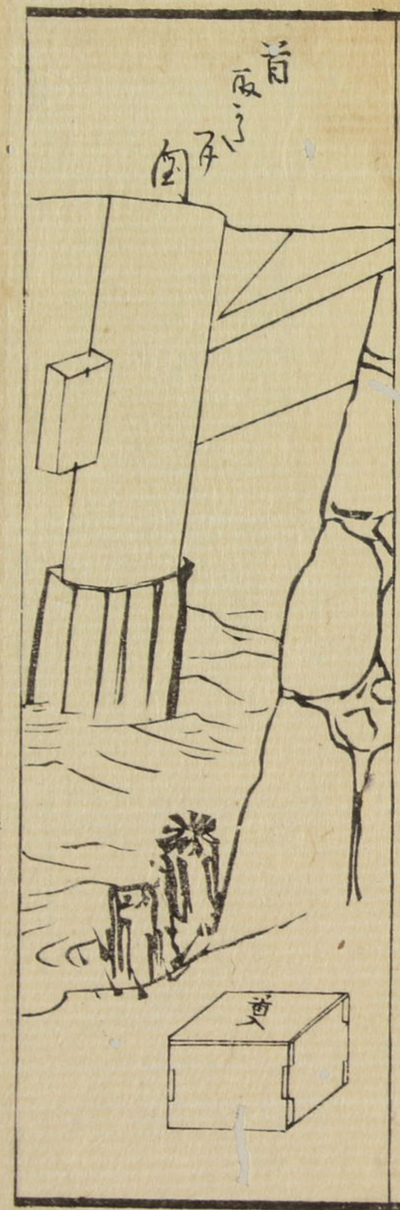
一四月十七日小山宿入口双方ゟ東照宮ゟ印〳〵た
る法旗五十流程押立て陣ゟいる〳〵同日八ッ時頃
より戦争ゟおゝりい事脱走方は發砲ゟ不拘ら
ず無二無三ゟ討入り大合戦ゟ相成上方勢敗走

いさ〳〵石橋ゟ中ゟへ引退脱走勢小山宿ゟて一
泊致〳〵翌十七日未の刻又〴〵上方勢捍〳〵来り四
時頃より合戦ゟ相成り是又脱走方勝利上方勢
本澤ゟ中い立場人家へ火を掛け夫より夕方宇
津の宮辺へ落ち上方勢先根長お笠間多討死怪
我人多分有之ゟ由脱走方ゟて器械玉薬多分捕
いさ〳〵同宿小山宿へ引取る討死二人怪我人養
生中

又〴〵脱走勢宇都宮へ出張致同十九日戦争ゟ相
成り上方勢敗北致小人数ゟて鹿沼辺へ落行

ホ日朝落城郭内ハ東照宮と市ーたる旗押立て何れも花々敷戦ひの由但ー脱走人北部勢元三千人程城中ハ屋敷住ひ由

一遠近新聞第五號ハ記セーー京橋東側の欄檻ハ梟首の捨札ハ悪国有之此ハ爲を殺く探索セーー爲此の者共度々市中へ押入り強談等ヲ掛け又ハ商賣の品物ヲ持逃げ其外料理屋ハ入てて食逃げ等いろーー種く積悪人の由然ハ新処壬四月廿日抜ロ時頃尾張町下駄屋へ押入り強談ー



居ハ表へ九ッ時頃ハ大村様見廻りの者通り掛り迯ちハ下駄屋へ入込み此者召捕ハ相成るハより自身番へ引込ハ居く吟味を遂げ迯走ハ暁七ッ時頃京橋上ハて梟首ハ行ふたる由此ハ元歩兵相勤め居番時ハ浮浪の由

乞食袋

第壹号

定價壹匁

第二號

慶應四年五月六日

一當朔日霞関彦根彦屋敷ヶ御旅宿の　御先鋒惣督府榊原殿甲州路へ出立ヶ相成濱松乃勢警備ゟ〳〵藤町より四ツ谷通行ゝ由

一日光山當時上方勢ゟ〳〵持切り居しる此程會津勢押寄来花ゟ應接ありて遠く曲輪を相堅固御山の栄を以前よりも樂方ゟて保護居しとて是非とも此方へ活まかセ一ツの札ゟ〳〵應談最中然れ

處上方勢のうちより血氣兵ゐ者ども打〻炮發
有そい於兵會藩ハ　御木像へ對〻恐多〻とて
一切筒先を向け不申由
○大坂よりの来信ゆ云上方ゟ去ハ去月
十五日頃より古金錢とも直増ゟて通
用せりとぞん

一慶長金百枚ゟ代金九百五拾両一分二朱
一享保金百両ゟ代金九百三十両一分二朱
一古二朱金百両ゟ代金貳百六拾両三朱
一保字金百両ゟ代金三百九十六両二分一朱

一安政二分判百両ゟ代金六十一両三朱
一新大判一枚ゟ代金二十六両二分二朱

同錢

一十二文錢　二十四文　一文久八文錢　十六文
一銅六文錢　十二文
右ゟ傳聞のまゝ隨て刻す

一横濱より帰りし商人のはなしゆ去月廿三四日
頃より横濱も古金錢兵相場上方の通りふきま
ったりとぞ　未タ先ま定りなきゆ

○日光辺より来れる人の説
去月十八日日光より二里程離れし道ん今市と
中不中上方勢彦根長州土州右三藩の諸人数と
中るゝて余程毛薄なる敵へ會藩兼ゝ脱走
と号し何者とも知れぬ浮浪輩の者共へ伏兵
〳〵居一同ゝ起つて争戦ゝ成り変事不意
ゝ出て勝敗不詳

○去月上旬ゝ於て小栗氏の始末同氏ゝ
りの面書を以ゝ依て後れたりと雖
ゝ記す

小栗上野介清面

私本家小栗上野介去ル正月廿着額ゝ通ヒ作付
いゝ付二月廿八日知行所上州群馬郡権田村ゝ
出立廿着所生ゝ慶去月廿九日皮軍松平右京亮
板倉主斗頭松平鉄丸人数凡三百人程三会宿迫
操出し当月朔日上野介廿着権田村へ操入右人
数ゝ内重立ゝ者所越小栗上野介父子征伐致し
可申旨
總督府岩倉殿下知ゝ趣相違且又大小炮共可相
渡旨相違いゝ付引渡又市儀去ル三月高崎へ

相越可申之掛合ニ付同四日同人七ツ時頃同所ヨ
着仕旅宿致し同所ヨ同五日帯刀差おし可申
旨　惣督より仰渡ゆ趣ヨて則又市英吾連い
家来三人の大小を取上同七日九ツ半時頃高崎町
奉行所ニ上下七人引連白洲へ居置暫相待居左
い内共更ヨ尋も無之同所牢屋敷へ一同引連来
いこ付居越之程右七人の内中間ゟ三人ハ扣
居可申旨出役の者ヶ達又市初メ家来三人共斬
首致し中間三人吟味中ハ牢ヶ付高崎町安国寺
と申寺ヨて安軍より出牢ヶ渡則出牢ニ付右く

者共出會上野ヶ安否兼りゆ處同人儀ハ去ル六日
朝四半時頃三倉宿於河原更ヨ尋之筋ホも無之
上野ヶ初ヶ家来三人斬首致し其上同人所
持の品共不残荷運ひ被し何方ヶ持越ゆ旨兼り
鷺入其場より右ゟ者一人直ヨ出府前書の始末
申聞ゆ方不取敢此段ハ面ヶ上い

勤仕並寄合
小栗上野ヶ
留主居
御留主居勤仕並
小栗仁右エ門

壬四月十二日

右之通ゟ達ス

用人
塚本真彦
給人
荒井祐蔵
近習
大井誠十郎
塚本　貞
沓掛藤五郎
多田金〻助

○
一上方勢乗込ム留七山（軍鑑の名）去月ハ二日頃横濱を出帆し箱館へ乗り込由引續て関東方乗込の田天尤軍鑑品川沖を出帆せし由何れの説も未分明後報確實を以て第三号ゟ記すべし

○
一横濱詰合の歩兵ハ頃百五十人ゟ脱走の由

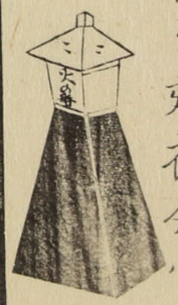
○
一仙台侯江戸屋敷悉不残去晦日迄ゟ引拂可申旨沙汰と申事ゟて右屋敷出入の者共ゟ聞

端不起合の由

○

此頃中より江戸市中處〻へ火の元強盗かの禦
として夫〻竹鎗拵出来分ハ別して用心の探
子就中孫町より是格別の嚴重にて町人中にも
武術熟練の者ありて中にハハ九年前より嗜み
居し者あり夫〻覓ける若者交番詰合ひ盈ハ四
丁目横丁の番屋へ右〻布當幡を建夜分ハ

麹町
店中

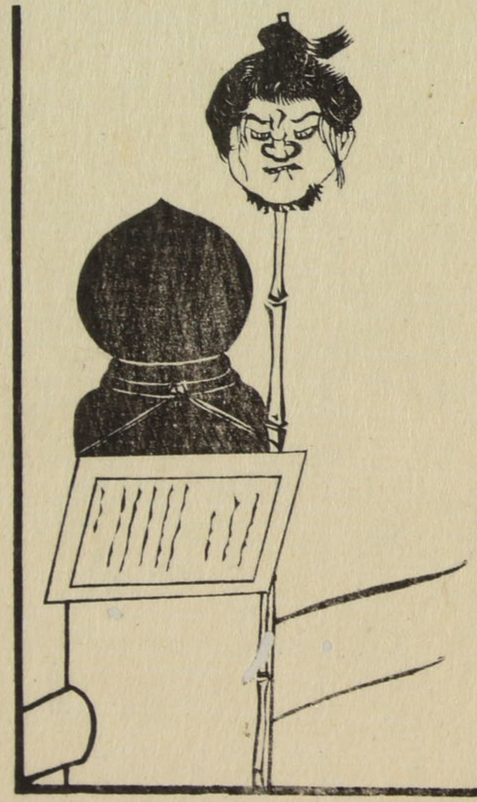


彼燈籠を出し殊の外嚴重に裏表隅〻までも金
棒にて見廻り若し事ある時ハ詰合の者悉く相
通し各竹鎗を携へ集合する由既に此程中も出
兵粋の者七人斗或店へ雜沢ケ敷義申急る
なひ直に右の詰合へ中觸し速に取圍み三人
程かゝめとると云ども町人の事なれば格別の
手荒きもなすべし併し第一火の元用心押
込強請の患ひ分りかねるべしと一同頼母し
き樣子なり
右に付おうしきもあり右詰合の内に柔劍なぎ

好める者ハ各〻自分弁當ヲ〻〻皆合ひ由ニ極き
どくのあふして最寄の人是を云て醉狂隊とう
ヤ流言〻〻るとなん

○筋違見附橋東側らんらんゑ結付有こゝ
梟首の捨札并ニ略圖

大砲隊差図役
河津郡太郎
領〻歩兵
与四郎
右こゝ者神田豎
大工町辺及九郎
町人門番白状
付旦不面ゝ付令
斬首ゝゝや
十月



花月雪

三号

定價壹圓

第よ吹風第三編

慶應四年五月八日

○去月廿四日奉庄辺の花卿水海辺より
、を帰府し吹りるる
下總の国豊田郡多海道宿を雲石下村と申雲へ
脱走人二十四五名ほて通掛り中飯いたし同村
名主を呼出し申りれハ此方兵是より水戸表へ
活撥媚伺いとして罷通り者あり扱先達中より
も所々より戦争ホもありつれハ何方の村くまて
も歩後ホて定めし労れのみ存すれ共此の方
共も引續き野陣宿営の義ハ以を一同器械ホ

の運輸も自ら大仮よ付気の毒なりと是より次村すて人足接立教ゑれみなと申入れば名主委細かしきりいろて人足共取集め器械ハ悉く積立しゑ元四五丁程も運びおせ〻ゑ右人足共一同申合セ次村迄ハ申セ共什作何方迄引連られゆゑも難斗と皆一同持運び〻器械を畠や田の隅へ捨金迯去〻ゑ右脱走方ハ不知〻二三丁程先へ連行セ〻ゑ不斗後を見〻ゑ右一百性共も人も見ざるゑず去ら何拵ある事ぞと不審ゑ思ひ立帰り〻ゑ路の左右ゑ器械而已残り〻を見て

安う〻さるゑと急敵ゑ〻直ゑ右ら村へ繰迯〻ゑ名主を呼出〻悉く立腹の談判ゑ及ひ同人ゑも當惑ゑ〻只受託入と不容易ゑ人近辺ら和尚を頼〻右脱走方へ託入ハゑ始め程ハ中〻聞入さらゑ〻ゑ段〻の左扱ひゑ付慈を僧ゑめんで許すべ〻ゑ名保許容ゑ付て沙汰あり右ゑめゑ不面ゑ依て為謝罪と金百両并三十俵可出と申付ら也ば僧義〻て同人ゑ命し早速彼并金出セ〻ゑ強〻ゑ脱走方申ら〻ハ扨ハ并金の義ハ無名ゑ貪ら汚ゑ名ゑあ〻て全祥當村

名主等平常心得方以下の外の趣も聞入有之ま
ゝ自然村内の人気ホも居合申さゞる
基ひより右拵の不得も起まりとて殊の外嚴談
あり右米金を早く其下々役組頭百姓代ホ呼
出し小前貧民共へ比米金を不残施行へしと命
じ候ば下役の者共一同難有仕合と存く申述
已後相應の法用ホも急度相勤むべき趣申ホ
出ども脱走方ゆてハ右様公儀遠の者の配下の
手足ハかゝる情ゞと次村へ人足を命し器械運
輸せし由

右米金配賦の節中付脱走方より右の下役共
へ申ゆ所ハ我ホ何れ不遠水府より帰るべし
其砌名く配當の請取を慥よ妻お達此方へ差
出べしと命せられたり扨同村の者共並よ
近辺の村くよりも大よ脱走方ゆて此度の所
為業を称讃実よ
徳川家の法威光且つ名義のなりゆる事は難有
事ぞと向後脱走方とあゝハ何様の法用も勤
むべしと皆一同申をる由

○壬四月十三日福嶋より来快の写

仙臺様法人数大満口に五百人程御固めまて當時は合戰をそれ白川口より本宮口二本松口所々別々中山石莚辺まも第日合戰有之れ只今八會津勢塚卸とヤ式まる引取厳重まる固め居り暫く合戰無之由

相馬二本松三春様白川口へ法操出しまる相成り御勅使澤三位様官軍勢凡四百人程まて庄内征伐として清川口に御出陣就ては山形上の山御人数操出しまる相成り同所まて合戰始りに不

勝利の由然るに庄内方多人数六十里越より地名天童に取掛り當月四日朝六時落城致し市街ハ過半焼失致し尚又官軍方清川口に引取れ申同ハ時長瀞まて庄内勢と行逢ひ合戰まる相成り山形柏倉天童落武者共一同操出しまる相成れ由定て大合戰まる相成り可申同所は家戝等運輸まて大騒動の由

去る九日上杉屋形様は人数千人程板谷泊りまて當所盛時頃法通りおされまる夫より乗歩泊り十日夕家老毛利上総外採凡二百人斗りの同勢まる

て當所へ一泊後今朝沖出立ヨ相成り仙臺ト
法出の趣又市家の風聞ハ會津伝伐の式ヨ付
法取扱いとして法出張と申い由多分和睦ヨ相
成い事と當所人気靜穩の由

○去月十五日出京都より象状の写
此度御還幸御供ヨハ吉川若殿清栖若殿外藩三
千人程の御供之由

長州藝州鍋嶋備州右四藩大坂表ヨリ御瑕国元
ヘ出立致されい由
當時京地ヨ罷立い大名方ハ加州阿州越州三藩
の由外の大名方ハ人数少〳〵ヅ〵残置き何
れも領国ヘ引取ゆ由

○京大坂町觸の写
今般諸国の大小神社ヨ於て神佛混淆の式ハ御
廢止し相成い付別當社僧の輩ハ還俗の上神主
社人ヨ付て称幣相轉神道を以て勤仕可致い若又

無擬差支有之且は佛教讓渡すて還俗の者不心得の輩ハ神勤相止罷在可申ハ事

但還俗之者僧位僧官返上ハ勿論ハ官位之儀ハ追而沙汰の事當今の処衣服風折烏帽子注衣白差貫すて着用相勤仕可申ハ事

右之通ハ 仏出ハ皆洛中洛外寺社共不洩猥早々相觸可申ものなり

○壬四月廿五日横濱より来り人の話ハ

昨日四日肥前人数横濱へ参り此度奥州ハ官軍差向ハ伊達仏蘭西軍鑑一艘借受度旨申入ハ奥州人申ハ奥州へ御出張と申義ハ一切ハ貸申ハ義ハ難成候ハ御買入ハ相成ハ相談可申由返答のよし其後如何ハ義未タ不相分後報を以て云べし

○あまてらす神乃法束乃法人と　會矣

人の道と義まことをつくるなり

○世を覆ふ異国の雲の絶間より　桑麦

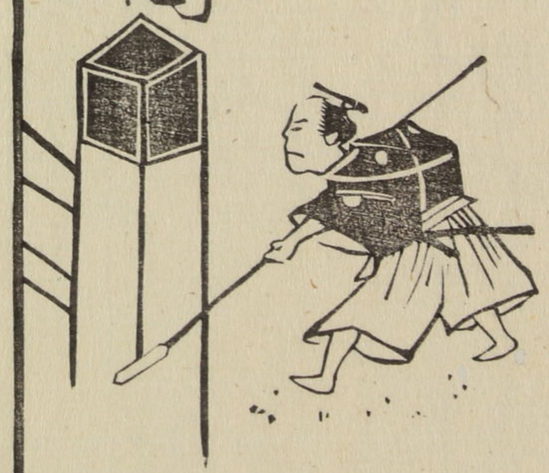
吹てはらせ伊勢乃神乃力

○かきたれと流るすれとも世の中は
まえ〳〵するものゝ家ハ徳川　よしえ

○昨七日九ツ時大橋より来りたる者の咄ス
或侍士三人屋根船ヨ乘じ大川を流棹し来り大
橋の橋岸ヨ船を止めけゝより上陸て向河岸よ
り橋上を歩み来り〳〵ヨ又此方より二人の武士
行違ひ〳〵と見へしが即ち三人ハ刀鈔を抜放ち今
三人ハ鎗を扱ひて右上陸の三士へ切掛け暫く
戦ひし間ヨ三人の方三人ハ股を突貫れ三人
ハ腕を切り落され残る三人ハ叫ひ逃ゲとや思ひ
ん其場を退走る野■羽丁様屋敷へ逃込しとて
両人の侍是を捕押んと追掛しが何方へ潜伏し

我不相分の由近辺往来の人〻不意業外のさて
ゆへ大騒ぎの由何等の柄
まて争戦(いくさ)よなびしを
何方の侍士なる事実
不詳確説(たしかなる)をもて
次号ニ記すべし

大橋まて刀剣(かたな)を争ふ図



茶道

四号

定價壹圓

○

一上州前橋藩去る三月御新徴の御使として上京あらせしが
當二日より江戸上やしきへ御召とおぼしくかくまぐ延引あらせしは
いづれの故ありやとおもひしるその藩士のものゝ上京中
右御新徴の御趣意掛まおぼつかなく分分紙幣十七万
石と　天朝へさし上げ多いのことゝ　徳川家の御名ばかり動
きの義は免ぜねど実来よりかんと形ばかり形ひの事
まで御ゆるしに
又〻幽府の上田安房守殿への上書のおもむきは御使のみちま

わきまへずして行ふの法は法にそむけりいはゞ若しからず候
あだかも播州の法は法と申すべく然る一身の義ハ心得に乃
承諾ありしかば加へ候ところ唯有がたき仕合と申述し
とのよし近日確定なる御布告を得べし早く後号に
しるさん

○

一 播州姫路藩ハ当四日に大参事房へ御布告せられし由同藩も
紅葉を差上げ 徳川家へ仕へしことをやめるのよし聞る実
書を得べし今號のすゑに記せ

○

去月十八日英船佐賀より横浜に出帆せんとするより上方
勢志の英船に託し人数半分は海路半分は陸路と分れて
関東下向のおもむきをまさしく申越し同廿二日に
横浜へ着せしところ亜米利加ミニストル並英国のミニス
トルに應接ありける処思ふる子細ありて上方勢は船
おさへられるやめし上方勢より断られりと云ば余毅く
云んは日本国今自国のたゝかひあるの薬君あらたまる
送しは国の戦争に於援兵請へるも他国より是を
許さじと各国の條約をよりて戦械を輸て出し
この義は可宜しく知りあるべし 我国にはいまは日本

千戈の動きしより武器械に一切よきびしく商賣
相禁置しとせば英人さぞ〳〵閉口一云なく
金くんはちぐひの義とて すこやかそろきく乗び
依賀さぐ出上立勢のりきて私案加へられしとぞ

○

一第二号よりそせ〳〵糊所の若者とも當月日〳〵小山番所
石川河内守様へ呼きさ出諸合のもどよ一同奇特のる
ぞと出稼ありしとちん

○

壬四月十二日城陸國高田荒井と中はそろ〳〵其田伝法当

ちで先そろ外伝勢出大名方操もしよりおりいそろ
上方勢出勢想大持〳〵加勢出雲外山之家大約三
千人ばかりにて高田加勢〳〵〳〵操もし戦争よりおる
いそろ松代藩様続〳〵仮山藩城のよし上杉家来
是金上給ゆとも若侍士千余人を引率し真田加勢
〳〵〳〵若先き新町より陣を張り春日山麓静もし
松代ばかり伝勢出大名〳〵兵糧をおくられ
月日松本〳〵上杉勢ゆ六百人おし来りそろ
應接いろ〳〵居ひとし月十三日よりして高田城下
にて戦争そろ出国ありしとそ伝聞のまく剛也

○

一有栖川宮様薩摩に私ふくく一ト先は内京越ぶさうぐさに下ゐ
八方今官軍をもつて攻撃徒は征伐極ぶさんひくくい第三民論蒙の
若くよ溜りは限深く歎ゐ世ゐ見ゆうり平和の法所蓋は知扱ひ
ふうくゐ入ゆう

○

二月七日七時伏谷中宗左坂辺にて行方の落士よりやこ三人　義隊と
刀争のよう〜宮内出兵ゐ共ゐ人数一同よ沼田たづさ人来り出
の士二人打こ已りは陽りきん人逃去は出ゐ寸ゐ行方不明
よくふう〜宮ふじし刺出ゐ屋こ〜

寸ゐ出つ外は行り際
丹■極ゐ時八日風雨ゐ
辻毒ゐは行りくきろげ落
形節兵人居合ゐ人数は逃
落死すとつふ

土手
崩の
景

左右雲集

五号

定價壹匁

芳野吹風第五号

慶應四戊辰五月十三日

○奥羽列藩より奥羽

書付にて写し

強拒強諸藩へ会出しの

山形舎藩伝付ける　仙台藩出兵院より仙台藩先手勢及接

戦の模様　保家朱芸隆紀樹罷の儀中出仙台藩玉境陣門と

於て　乱妨狼藉の儀い全く賊人等の為

和り　会津城内坐り　へど五一ヶ月皆辛苦　奉警

天徳院様　名入雪節の先手隊出　利しく　確信中

付墨書行　法沙法行拒出賀墨仕り　より望ひ和ヶ月先者保

亟く指揮不約束の所後より有之候に付到極恐縮仕当時
城外より拾く蒙昭謨性相受し一先帰城致候に付家来
共歓喜出来り大く安堵仕候上い業室りも寛大
の御変革に付成下至仁の聖恩を感戴い奉仕候い
尤当時　王政御一新の御場合なれども我国体不
拘御勤干戈人心の向背を御保可被遊御国体御
とまれい勿論其方の事ハ農時の長雨勢よりする変と有之
自然民命の大よ所実係より此度ハ君主の儀芸篤と
御深察被成下今ハのみい兵と命津一藩のみ乃御変革と不拘
ね思召寛大の御沙汰成下り実以て奥羽御鎮極の御

赫然被為遊御勅使より相御到着家臣取り扱又
建白外の者ハ追分沙汰下上い取扱等云

芳無日多壬四月

仙台
米沢
盛岡
二本松
守山

○此六日甲州より伺ひし人のものがたりに

一甲府城先達中より官軍に対し抜刀し突出候人

凡七百人ばかり集り強勢中のよし

右甲府城より武器預かるものよりの案内書を紀山

ヶ迯び出候人数ならびに人数らぞかの山へ屯集し居候日々の

逐接見聞とも後ちべしとつくるよし　右ハ甲府城中

けるい迫日　先鋒総督御系厩組若年寄格兼軍務官

出張ともに可相成さあらば行き相ひめこと迫言いたべ

とぞ

○今清より当地へまいりし人のものがたりに

湖金
中村
三春
山形
福島
上ノ山
亀田
一ノ関
矢鴻

去月中より引つゞき奥羽誘ふ事戦争ありそはく怪の如く殺し往来する船隻のよう太田人の
ものゝ奥物地方の勢い強らぬ一段し遠く伝聞驚
誘へ押出さんとくわつぷうの様拵あり敵は先田原四人
いまだも出張せずとも云いれけり

○

晦七日糀町へ旅宿ありし紀州藩の士人数登棄来
とゝる人源吉して武百人ほど横須へ出るのよう
見い伺らのゆ掘る来評ちゝ

○

加奈川と川崎との間よ寄つ合ありしが当六日ころより
引ちゝい往来平出のよう

太寄つい安記拵ち長の国よ有しが太一月仮家よ拵ル

○

去二日以ゐ上野へ夜寄ゆより仮設を建へさんしよ寄つ
より彩長孫八人往して太鼓を打セし
翌日又し仮勢四辻々入せられし八月深二十人往
ゐ去せりとゝ云

大仏勢使様仏つゝ様へ仏対応のゆう合ありしが仏つゝ様
仏ふ様ゝ仏遠寄ゝ

太ゝ身上野廻巡の市中騒の糸動揺ゝゝ家財たゞを
行者ゆいを退ゝゝふん

○此の日下谷八幡宿の人のゝゝ

今津藩士い実ゝ鬼神のゝく生勇猛比類なゝ去月
中旬下戦争のせつ八幡廻巡ゝ上丈勢百人程屯集也し
ゝ脱走兵六人と今津藩三人ゝて繁ゝ附今藩税吏兵
ゝ云けゝい六人ゝて鉄炮六発ゝて逃ゝ退くべゝ六発あゝ云
一発ゝおきゝくゝと命じけゝるのゝく六発ゝて退さゝ
そのゝゝ引続き三人の今藩切入り走ゝくゝて三人とゝ
欲首二つゝをたゞゝ取りゝゝ　ひ未詳

○

一猫鴨掾撲滸出ゝゝおゝ旅り此字江戸表ゝ出宕ゝおゝ旅べき
ゝゝゝ六ゝ川洪水川止ゝて川崎宿ゝ出泊宿のゝゝ
他国のゝい築地ゝあゝゝゝ外国人ホテルの名他国ゝゝく
出ゝゝゝゝ

○

先達る中曲輪内諸侯其の他の今掘鑿ゝゝ五くづゝゝゝい
内の人のゝ掘やゝおりひゝゝ　大熱暑府ゝりのゝ他他
ありゝく見暮せゝゝ
又ゝゝ往ゝ他沙汰ありゝく御止めゝゝ

文久銭十六文
寛永銭 廿四文　毎年始まり

六月十二日より

金壱朱ト弁銭 拾七メ弐百文 相場壱歩ヤ

花壇

六号

定價
一匁五分

西ゟ吹風 第六号

慶應四年五月十六日

○此頃新聞中より抄出せ

一米利堅(アメリカ)人と懇意なる日本の謹士あり或日(ひ)米利堅人に面会(めんくわい)の節(せつ)徳川将軍家の事に附て云へるに徳川氏は元(もと)旧政府(きうせいふ)にて令を出し買入れさる私にあらずや然るに未ご旧政府に復(ふく)さずして私新政府に復すのやうなり尤公平至当(こうへいしとう)の条理(でうり)より論(ろん)ずれば旧政府に復をする至当なるべしと云ければ米利堅人云へるに至言(しごん)なりといへりと

後すべからざる方今要務の急務戰爭あり是旧政府の
なるを戰ふ故なるして旧政府の法律余光のなる
新政府遂に滅亡を免るる能ずして法れば新政の未だ
内へ納いれざる由へなるべし行れ政府廢と定
きりし後に行方へるり支後すべしと言へり
又云ふ米利堅人我が国へ強国なりとお
のひしに兵港の来内地を見るに恢廣なるを最
恐しき商船の多の船なるり強不安の人に迫し支
那の国語しといへ今日に及んぐいはれ人よ
り遠に猜れり強るるは人人は何れの法度も

朝とさへ唱ゆれば是に從ひ之を向ひ歌舞し
名実を失ひ不後を切ふ是則大弱国の徒しなり
今日は本国に於いて強国と稱する能ず稱今清
のごとくして名実を確守と進る志いは薩摩より外に
あるとなし此徒の法度は連れぬものし若者は
本を知らずして名実くの会を用るに是らを以て
人あらば是るべしと云く

○壹通新聞十号に一端を記せしが尚実
書を切く云に載せ
し交法川□□茶帽に廉を以ら作出はか条に

寅彩れ之いとハ寛典の仰所重と以徳川家康公
遺墨い所ら拝む徳と以雅名ハ情懸の仰ハ
なみと松平家の家ハ徳川家康九代の孫松平経
氏ハ下と松平氏いてより代々家傳の旧ハ
百年余を聖徳徳川家に忠節仕い空い万徳川
家名ら松之いと陸奥仕多多の恩顧仕多志新と
内望い万徳と松平氏地ふ新制仕多行幸太ら情
実らハ実食ら恭の徳川家僕とら松重と松平
歓新いと之

壬四月

林　昌之助

○絹海より来状の抜出

壬四月十八日川表へ詰合仙台人数より川
下市御へ老人小児い子と迎い松猪俣し文分
人数引揚と松平いあと十九日今ハ野押寄
来り次日来ハ大多へ攻入い家城之本松棚
金松ら之来ら之家ら悉平の人数一斉と及バ家城中
大多家の長家へ火とうけ重き一日逃去り郭内
大火と松平氏下市御へ飛火いと説と大火と
○下松の家々今長浜迄り御し火を防ぎ家城
中岡来ら今ハ市中へ引下いと強ら安

脇　大納言様△軍は石連坂山迄は苦戦の趣
く福島迄は立戻り日西より川渡して仙臺へは
苦和敗はは
仙臺人数是迄敗北をぎて白川へ撤出しこれ敗
ヤは
一廿八日奥羽の諸侯らす仙臺へ合戦し大
保茂さくは壱ヶさ内大軍にて攻寄りて
中をもつたら代世仕は
○白河より来状の抜出
壬四月廿五日の夕刻△軍は人数白坂宿より

押寄いて分国城より合津勢撤出し白川白坂
方の原野にて大合戦これ敗△軍大勝利の由引
続き合津丈諸戦後しい変△軍進むるとあとい
ど絶こ白坂宿を通り城へ若松宿を引去りと
ろ双方の死傷おびたゞしきこと申ては
仙臺は東北石川大和撫始め兵三千人ほど
廿七日郡山出発白川表へ出陣の由こと後こと七
千人程は撫しの報きこと申ては今般福島表へ
移規模つゝ来仙臺福島は為護和国始め居り従来
の人数まこと和敗めいよ

一九條様ハ白石ハ生留
一沢三位様ハ山形ハ生留の由
太閤様の事ハ敢ず知申上ス
○奥白川より来状の様出
閏五月初旬より白川白坂間系ニ又ハ大
戦争上方勢大軍ニ相押寄ル付東軍方今津仙
豊二郎松平稲葉棚倉ホの勢押出シ大小砲烈敷発
敢ず初より未刻迄戦争東軍方勝利ニ付仙豊
ニ方とも引物ハ〳〵ス今津勢一手ニて蓋ニ逃付
深〳〵ハ奥△軍方援兵横合より打入ハ付今津

勢逃むてとあさハず未刻より申下刻まで戦ひ
終ニ敗軍致シ夕刻ニ成て双方引取ハ
○横須より来ル人の話ニ
去ル廿七日二人横須へ来り或者家ニ罷相越シ
昨朝の儀ニ付ニ今ハ
として当ハの和物とり付ニ文久銭十六文の割
合ニ動定せ申ス二人の侍士大ニ援兵
行ハ付ハ猶いしまて此ハ敵ニ成せ申ス
去ル廿ニ日おいニハ矢張長岡までの通り八文の通用
と一通ニ成ニ付ニ成ニ付ニ入ハ変

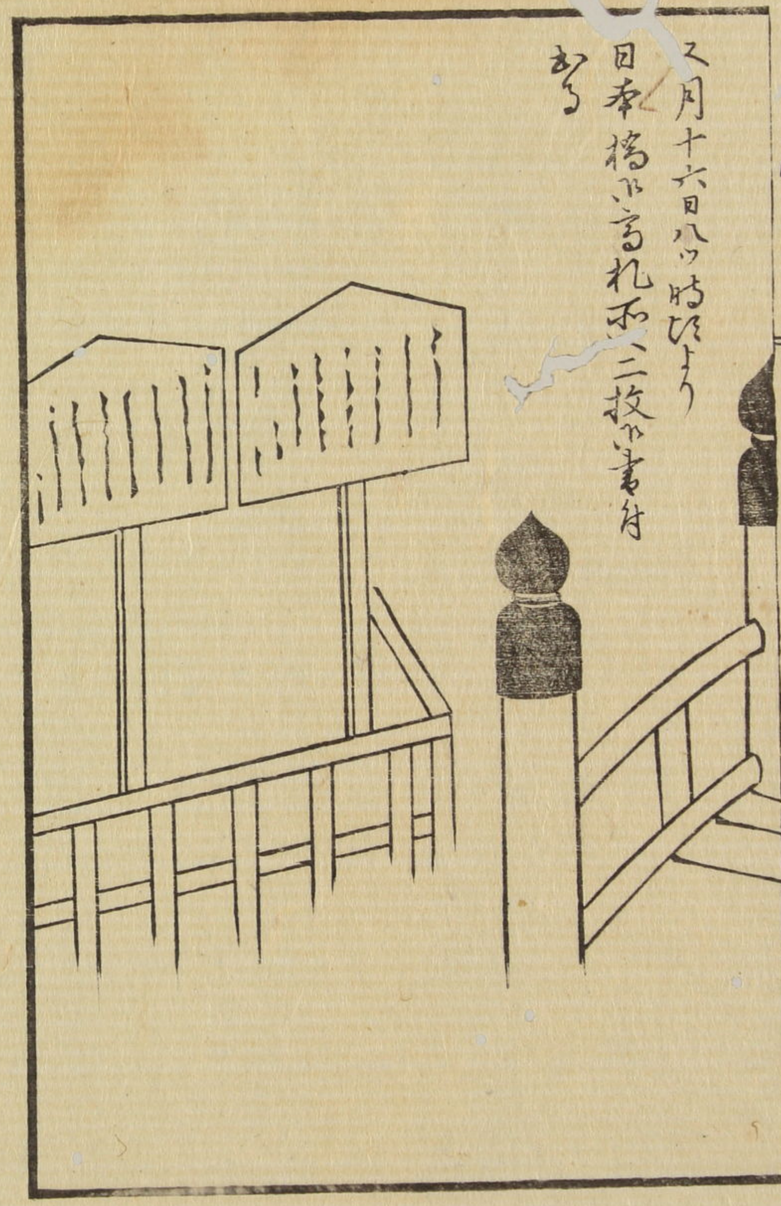
出拔刀いさしを家支婦を切殺し行方とゝ
く逃去りしとたん太殺されし女殺より用而偖
△軍方へ太の始末報出しとそれ何れ成いか実
人悲歎のかゝむをみせり

○酒井家家臣の書
違ひを哀訴に今殺を人□□番所渡分を二名と

脇を殺害且組先以来治世に遂無をなき家名
和漢ら 但身体に強を和を武を錬を佩いり氏
太情実を家脇実に乱ふ中はいより実に徳川
累代和庭蔡殺に乱を費徴ふ仕次分に拒実脇
歎脇相に乱に乱を乱なは仍に殺殺謀性為仕を行
は殺辞は云情に強を脇は逆は実にて本知へは人廃
く云行をら為一居はに分本ト云れ家筋に実元
東徳川家臣僕よてを家本家 但要仕はいより性
乱ら詩殺を尊しは実に分天君に実者みる
ハ世に子孫ふ本云はく徳川家臣に今ら

むり累世くり恐愛をふ孤を家を美列比肩い拓く
ハ君父と怪蔵すろく鋼くれ南り　に遺責を
ゥ家郷全寛宥し　聖意をいに咎ハ免ゥ是い
ゥども又ほるく上ってハ孫恐ゅてに世く
孫く封線くい制変ゥ世ハ上ハ各藩結ほく分も
是迄く色ゥく下るく家れいく身れを家鋼くて
ハ徳川家て陸況仕事殺　に國恐変岩殺てに世
い又ゥ地く美ハ太情を家　天遠是ゥ変ゥ変華
く新栖て身ゥ古上い美ハ南孤くほゅて孤遠
機安ゥ世い下行幸分伴中上い下思く公殺ゥ機

奈く上ゥ実獄ゥ孤ゥく拓を殺上い以上を忠へ
い〳〵ゥ懲ゥ拓分く　皇験をいく是迄所殺く士
民ど古鎖潟をまめゥれいへ忠孤を仕今をみゥく
正政に一新世ほに国獄くゥ時く府ゥ仮初くも君
ほくゥ侯と殺岩都拓利を美くい拓くてハ列を
欺　天勅後くてハに失結を礦しいて城ほく獄
銃ををゥすやくゥ源痛憂重く余りを犯　天勅
く罷ふ殺万配兵美を欺殺に謀略殺首



六月十六日八ツ時ヨリ
日奉搗ト言札不二枚ト書付
ヲ

覚

徳■■■■恭敬し実効を表けるべく様家に切労をら思合
家名知績ら作れ悔地縁を求ハ遊ら仏法と物加来しの
考くるる迄各を不ものざるべんを移ら遊家との
思食と為を上し愛豈図乃や羅下来しんの遠く寄を仏と
所報恩を抜載しなしざるのくるるべを人業を寄し素志と
房り傳法中ニ身を以倍く税走と乃び廃しと元集官軍を
お抗しを華ニ武城を掠奪しを光暴むらざる西国為民塗炭
の苦ニ陥人手奴ら令殺ふの止すと絶代せしむ素より天
害と除き天下を泰山の安き毛き後北ニ民を安く早く
安坂の名ひと示さしを名ん為ならんば猥ニ難敷ましるの
願ら以て萬く
所縁を釈迦しなり来ら君と乃ら速び御んの遠ひ
安く浄会安坂ニ各生業を楽ニ生命と中の広ぎを者や

五月

過ては以来脱走し家上野山内に籠り変し
毛集屯官兵を暗殺し或ハ官軍と偽り
民財を掠奪し益凶暴を逞しの条実に
国家に乱賊なり以来如何に者共見付
次第速に可捕出若一審に抵抗いたし
或ハ隠し匿ひの族有る共賊徒同様に
取扱ふ事

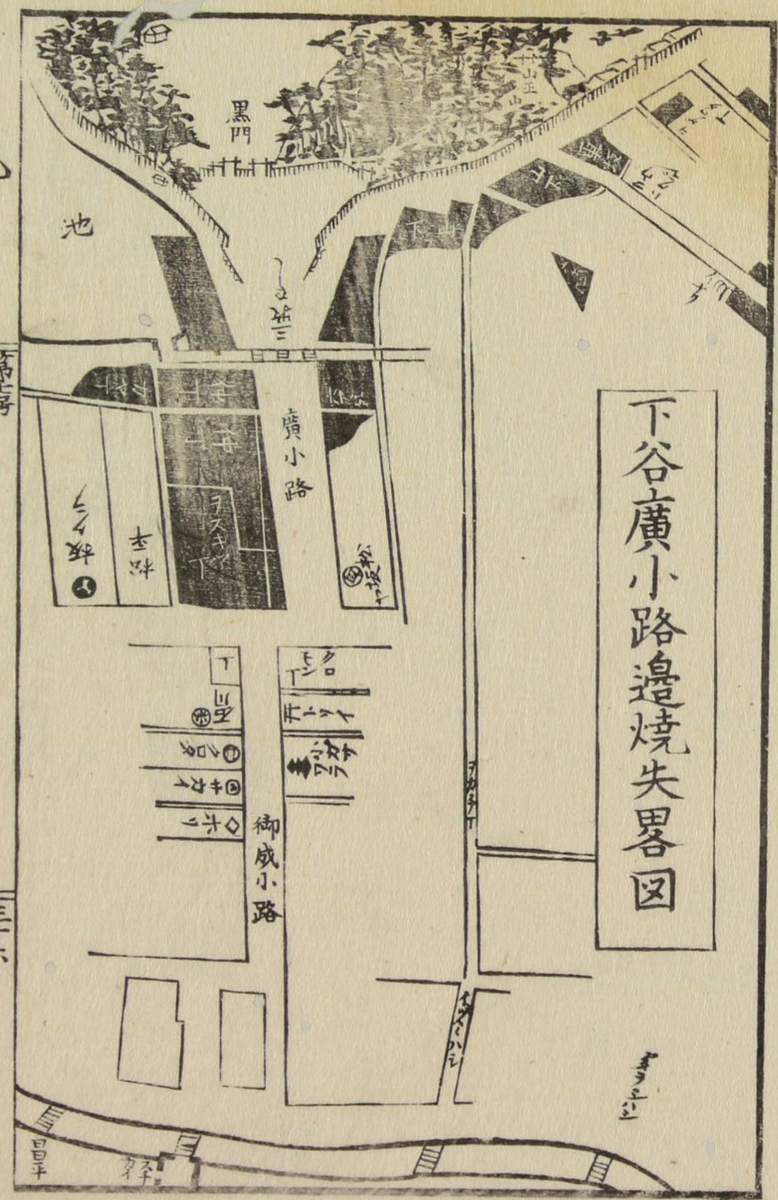
慶応四年
辰ノ五月

大総督府
参謀

上野戦爭并燒圖

七号

定價壹匁



下谷廣小路邊燒失畧図

中堂
文珠堂
吉祥閣
不忍池
門口

山内焼失
畧圖

変庶四百五十五月十五日未明から長崎の市中こゝ哭へ
夜軍は人数探索しに出張に付指こふ海辺切りこれ
茶屋なくに軍勢上陸に出かハ方を取囲めに軍
勢人大砲小筒打ったけは知山内から打出す
勢こ打もしれ方の砲撃筒の長がれくすさまじく
打柄砲火の写ひ湯海辺から山内火れ始りて又山下から
も火炎しに打出南の風吹をげしく池の端仲町
ふ出海鎖番近焼失を走より元船町二ケ所すす
きや町四丁目大門町三丁目海辺を抜下目組町
上の町船町辺小屋焼失五条を抜目へ町

下谷町二丁目洋紙屋弥右衛門小屋焼かく
焼失波しく新く船焼うて砲撃場くふり
海り及あらきのとき五焼りの内より統走方仏
さの海なるや船町を探軍きに五十挺夜軍は人
数を目がけく切て出く雷と撃て戦ひけるが夜
軍方ハ新手を入替せめ立けるゆへにいく統走
方色めく下を夜軍一時く逃掛船町をお渡り山
内へ乱入し捕く乗じて血戦を打ち山内家を
の方形色の屋敷辺から大砲おびくしく打掛
法いく中豊と同じき五より船上り焼り立上り場中

而しかも火災し市内火中の騒戦未曾有の御さ
目を驚き汗かりて又一にのも火ハ山下仁王門
町ハ四辺ハ三ケ所焼失也ハ山海町又六ケ所山下
通り蔵屋敷角屋敷みな車坂ふ海焼失す山四面
ゝ戦争有し廣徳寺門前ハ表側ハ丁汐り柳の
格子ゝ焼正り又一ハ根岸御内焼失格女
屋敷宅ハ表ハ彩焼失数屋敷焼落家四屋敷外ハ
屋敷表ハ彩焼失然るゝ彩焼住院ゝ毛集の祝走
孫宵ゝ是又家家と打合ゝ和歌益ゝ大勢熱しく

若光ち坂湯屋一彩ハ又ケ所とび〳〵焼失浅
草ち堂ち坂菓子二彩焼失千駄木町表側板倉稼
やしき続る三筋町廣ち格子ゝ焼止る谷中天
王ちつ谷二丁ふ彩菓や町焼失山四戦争有し
天王ち地内迄ハ焼失又今の場所る寄云ハ迄附
金く格子ハ戦争ハ表家丈大勢有り
吟味ゝ歎くべし也むべし山ハいふる日ゝや笑
東方一の重物一時ゝ焼失是市中の老若婦女
をのが迄ゝ逃ゝさまよひ哀しの表御ゝ陶器
天のふ是所是此ゝ此方多

東方雜誌

八号

定價壹圓

号より吹風岩八弾

慶応四年五月廿四

○巣地四より来りし人の話く

一昨月十七日八ツ時比軍隊四五百人行れもホ號を為ひ岩先く小旗を押立て乗馬隊赤と見しき赤四五名続引くして押来り巣地くを立し多口上紙くを以屋敷を記図く一発く鬨の聲をあげ四方小銃を撃立く言ありてラッパの吉笛へると敵者救援を止め支より門氏屋内へ操出く探索せしく初節士分一人も居合せず他つ家族のもの

一夫人船ういまつ一日過去せしよう
いづくの車掛なるゝ洋ゝならず不云繁弁のこと
ゆゑを傳大溪訪いまつし中ゝハ流丸のもんゝ底
物とうけしものもあるしゆ

○

當月十六ゝ夜赤坂四ツ谷大番しゐ下流ゝハ多口
上弦ゝ妙居焼失れ又云失のよう

○

當月朔日奥州白川にて大合戦有しいよう雅誠
をひゝ次号ゝ記をべし

或人の云闘爭ハ軍化の基なりとゝ當時の
報ハそのゝを鳴ゝ知るゝ或洋書より
抄もしゝあゝ記せ

カリホルニヤ州ハ元メキシコの領分なりしが
墨国の千八百三十九年卯ハ本の天保十年ゝ地
の人闘爭をおこし彼地と結ざる内ゝ八九
年を経て墨国の千八百四十八年卯ハ本の嘉永
元年ゝ和合亮国よりメキシコへ金を拂ふく
け一州を買取永久合亮国の領地とあるゝ時ハ
報ゝ產物多ゝ金沼湖浜水銀石板木綿穀菜

実牛百頭羊千匹ある也ひとり不足なきを以て
此地を合衆国へ買入しときまぐれ人の数も
あまり多からざりしが丁度金山を見むし
珍しき渡世の石も求うるを付法国の人迯て
入込日々月々その人数増して遂に金山渡
世の者ばかりも十四五万人の数となり金銀を
掘出すこと又夥しく為に六千万ドルラルの
高を法国へ換もして世界中金銀のね値を動ら
せしかどのとまく此地のもん曷一貫ちらずけ
常にても一七日の内に七十五万両余の金銀を

掘出すといふ然ていサンフランシスコも初め
は淋しき所にて百姓家の六七軒もある小村か
らしかども僅十七八年の内に人家の人数建な
らび商賈の店数貨物を求ふ新開地なれ
ト雖ども濫觴の所なり新鋭の石を製する所あり
金銀の小石物を他る所あり砂糖を製し酒を造
港に入る法国の商船をおろしく一度の内に私
の出入二千艘余軍上を乗る者二百人余に下
らず実に太平洋の東岸に比類なき大都会とな
りし此地起立より幾年未満にして火災あり

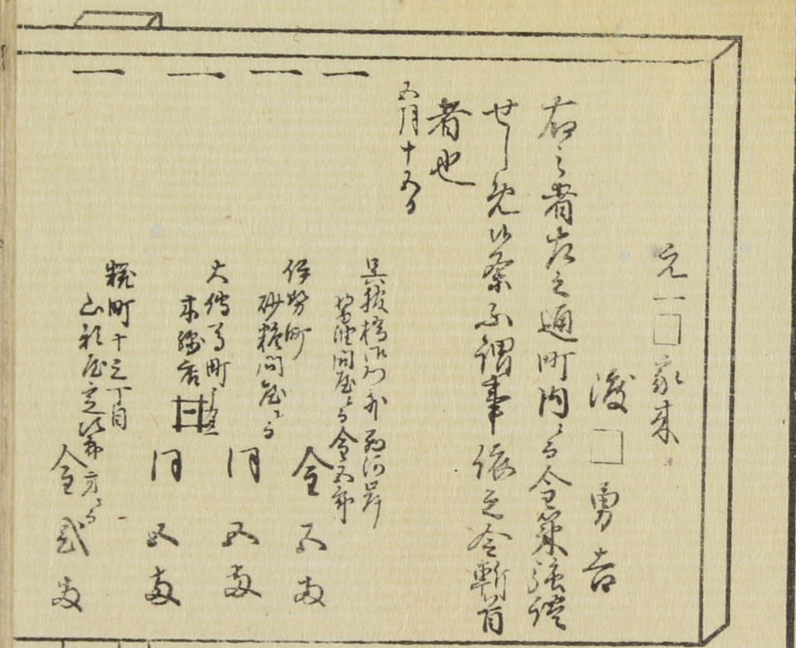
史事の紀ごとく新に蒸汽船いかをよりも
よくおれりその一二を挙ていちんさ軍上所を
建ること六十箇所と費し金空の費こと二十二箇
所海軍の害生所を建るときも二十箇所を費せ
ども又メトロポリタンといふ芝居あり大なる擬
こと見地二千人を入るべしその外寺院学問所法
問所宿所商所の大造なるハ指く知るべし
尚今こゝ列りこゝハ尚一倍しこゝ繁栄あるべし
○余くもいひしを聞かりカリホルニヤハ新に開け
たる地にて世界中法出の人貴集り先を争ふ

こと法世の所を励む場所なり既に支那の人もい
ふを金心と唱へ先金なり今地の法世にも掛る
もの実に一種なり金をもとめ口にも金を幸抱し
て相違こと元を出しらへ中出へ向るものも有
こゝハ山地に居をもしこゝ生涯所ものもあり
山かうもと見こゝ考ることハ本とカリホルニヤハ
正しく西東向合の都市なれハ多ハ者海の船
御紙を出来僅二十日の航路にて彼地へ渡るべ
く江戸より長崎へ乗中するこゝ程のこと
なれば日本の人も渡こゝカリホルニヤへ出掛け

元をあるものゝ変易をたゞめ元をたゝき出
い今心の法をしるべきゝ方代を仕もをりの
実かるべし是又日本風の悪沢あるを

○

又月廿又日新吉原小路へ



一十二月
かつをぶし一同弐ツ
金弐朱
上ハ弘化四年ニ新丹ニ出ル内ニ而ハ代金ニ而ハ
代金三朱余有之ニ付ハ
かつをぶし町江ハ
弐ツ代ハ
金壱朱壱分
一壱文
一弐百文
右之外江ハ新しく
金壱ツ
金壱朱
辰五月

文學

九号

定價壹匁

第九号

慶應四戊辰五月廿八日

○市ケ谷柳町くてい市中一同申合せ押込強盜ホの汚穢くていづれも此度捕と相一町内自分宅く結合差事変ある時ハ懇列しく雷物く組つけ

一裏捕ハ働きハ名ハ金ハ五人二宅捕ハ三人づ

一其ふべき紀定くてハ金ハ行ハ町人用金の中くく配賦せるくこれ之ぐくあくハ不ハ勿論也

一鎌くむる迄も鎌くを他のくく人雪ハ名を盛

賞せりとあん

○
聖院佐野より来りし一人の話に上総安中辺へ流
浪人数追々乱集のよし板橋を切て無しく次号
に出るすべし

上総辺より来状の抜書

一河越河内守勢数に付橋場ら石上南町佐貫
城ら堀田相模守へ移け太に付門家より国内人
数召寄し並に如去月十八日矢に行方不知
二三十人程不審に押寄せ内より火を掛け出
し切り込に当時捕越い〻何地とも知ず逃去

いよ〻国内人数の問邪死一夫人手負十余人死
有〻いよ〻以上行れのよし和歌山藩
仕り下評に又〻大軍にて押寄せ中船
乱〻警護の船の乱りに空砲を発し太気
場石垣数カ所砲中上ル

五月

○
一小田原より来りし人の中けるい出し廿三日
日比谷の浪士ら三百人計り名相　御関
所へ乗り掛りし和田に国大久保長人数中し

けるハしさ而ハ不潔おくしていを切れ然ふや者
ヤ波ド垂きめ伺くもあやーき紙なる故太亜切
波判中ゝ出ゝ紙ゝ系統へ中ゝ逆ー英ゝ江戸地方
蜀の　統督家へもヤ逆ゝ垂ゝ中伺ゝの仕若なる
小ゝ人詩ゝて亜ゝ掛りハ変陪人ゝ之を捕ひ
ゝより引下ー伺地ともなく連伺ーとなん太二分
江戸地方の△軍去ル廿四日二千人程尚地ハ
出ゝれ敗ハ使今伺笑のまく刺す

○

去ル廿又日夜川時宿より来ゝー人の話ゝ大蒙

立ゝて合戦有ゝ伺ゝ也小統潰ゝて砲戦ゝ以人
伺れの仕人数なるゝ不れ分ゝ猟級おも日防伺
ゝ後報を始べー後号ゝ載す

○

去ル廿六日東海道を下り来ゝー人の中けるハ
現今報ゝて合戦さゝんゝ伺ゝ如ー太ゝ分
最寄宿ゝ厳重ゝれ固め居り徒来ゝ
様ゝ殆尚惑のよ

○又月□町市解書ゝ写ゝ亜り

徳川□□□

後河内守府中ニ撰之ニ而作所知高七十万石下
賜ハ有之作出ハ事
他後河内一番家奈良江漕奥於為ハ下賜
ハ
五月
一格□□□
自今藩屏ニ列ニ加ハ有之作出ハ事
田安□□□
太月文

徳川□□□
今般家務相續ニ而作出ハ身内ハ格上家ニ成ハ事
一格□□□
今般藩屏ニ列ニ加ハ身内ハ格上家ニ成ハ事
田安□□□
徳川家臣ニ家自今皮袋ニ成ニ而止ハ事
太ニ成ハ而作ハ万那中家相続家臣ニ迄
ふ成相入ニ早ニ相続ハ
又月廿四日

○五月□町御奉行所ハ伏見奉行市岐裁判ハ
とハ改ノ事ハ福山ヘ写有ヘ遣り

警衛府補　大原前侍従殿
判事　野田三郎殿
加勢　西尾壽江守殿